

【私の考える沖縄振興】

農業生産法人（有）水耕八重岳 代表取締役 ● 渡久地 政行



今

から25年前の1985年（昭和60年）、私は、つくば科学万博に展示された水耕栽培の前に立っていた。一本の木に12,000個の実をつけた巨木のトマト。今までに見たことのない見事な風格。あの衝撃が私を農業の世界へと導いた。

当時、電気関係の仕事に従事していたが、幼いころから専業農家として働く父の背中を見て育ってきた私は、年を重ねるにつれ農業への関心が高まっていた。そんな時に出会った水耕栽培。これまで培ってきた電気設備の知識を活かして農業に新しい風を起こすことが出来るかもしれない。一念発起した私は平成2年、渡久地農園を創業。栽培品目に悩んだが、長寿県沖縄で昔から長寿食として食されてきたゴーヤーを選定した。またちようどその頃、ウリミバエの根絶で県外への出荷が可能となり

追い風になると考えたのだ。

肥料設計や植え付けなど試行錯誤を繰り返して、やっと栽培技術を確立したが、夏の最盛期になると価格が暴落し経営が成り立たない。周りの農家も同様で採算が合わないため、出荷せずに泣く泣く廃棄していた。これでは新しい風など起こすことはできない。そう思った私は、一年を通して販売できる加工食品を開発し販売することが経営を安定させ、地域の農家の手助けとなると考え、事業内容を転換した。

乾燥ゴーヤーに漬物、いくつかの加工品を試作したが納得できるものがない。そんな時、家族の一言が一筋の光明を見出した。それがゴーヤー茶である。布団乾燥機にフライパン、家にあるものを利用して開発に明け暮れた。それから一年の歳月が流れ、平成4年ついにまるやかで香ばしいゴーヤー茶が完成。完成を機に有有限会社水耕八重岳を設立、商標を「ハイサイ！ゴーヤー茶」とし、4力国に特許も出願した。現在では、日本、中国、台湾、ベトナムで特許を取得している。

しかし、開発したものの思うように売れない。ここでも苦悩の日々が続いた。「ゴーヤーのお茶な

んて売れるはずがない」と罵倒されたこともあった。それでもゴーヤーを、ゴーヤー茶を全国へ普及させたいという強い信念があった。県の産業まつりや県外の物産展、イベントに参加し口コミで少しずつ売れるようになり、平成7年には、国、県、名護市が助成する農業構造改善対策事業で名護市中山区にゴーヤー茶工場を建設することが出来た。

その間多くのお客様や地域、関係機関、行政の方々の協力を得、励まされ、支えられてきた。その頃から生産者、お客様、地域、従業員が競い合わずに共に生きていく結の心「共生」を経営理念に活動が続けている。

ハイサイ！ゴーヤー茶開発から18年、認知度も上がり農家から仕入れたゴーヤーは5,000トンを超え、多くの雇用も創出することが出来た。また、地域企業に対しても燃料や資材などの仕入れて少なからず貢献しているものと自負しているが、認知度が上がる中、課題も多くなってきた。特許を侵害する類似品や外国産原料を使用した粗悪品が市場に氾濫し、国内競争が激化しているのである。

現在、弊社では海外への進出を行政と提携し積極的に展開してい

る。台湾や香港などのアジア圏ではゴーヤーが食されている事と、沖縄で作られた食品は安全で安心であるとの評価が高い。地産地消の考えも大切だが、外貨を沖縄に入れることもまた重要だと考えている。しかしながら、独自で展開するには非常に厳しいものがある。海外への販路開拓、コミュニケーションに関する人材育成など、そこにはやはり、行政の支援と協力が必要不可欠である。

また、もうひとつの大きな課題に原料の安定確保がある。沖縄県における農業を取り巻く環境は、生産者の減少、高齢化の進行、後継者問題に遊休地問題と多くの課題を抱えている。ゴーヤー生産者も例外ではない。ここにも地域や関係機関、行政の支援が必要であると強く感じている。

沖縄で生まれ、沖縄で育ち、沖縄で生きていく私にこれから出来ること、やらねばならないことは、日本で唯一亜熱帯海洋性気候であるこの沖縄の豊富で有用な生物資源、またはその加工品を県内外、海外へ販路展開することである。それがこれからの沖縄県の農業振興と経済振興に微力ながら寄与できることと信じている。

（平成22年度沖縄振興功績者表彰被表彰者）